

# 父の遺書

野村胡堂

—

「お早よう」

ガラツ八の八五郎は、尋常な挨拶をして、<sup>つつし</sup>慎み深く入って来ると、お静のくんで出した温い茶を、お薬湯のように押し戴いて、二た口三口<sup>すす</sup>啜りながら、上眼づかいに<sup>あたり</sup>四辺を見廻すのでした。

「どうした八、たいそう御行儀が良いようだが、何んか変わったことでもあったのかい」

銭形平次は縁側に寝そべったまま、冬の日向<sup>ひなた</sup>を楽しんでおりましたが、ガラツ八の<sup>もつと</sup>尤もらしい顔を見ると、<sup>いたずら</sup>悪戯<sup>け</sup>つ気が<sup>ほおづえ</sup>コミ上げて来る様子で、<sup>ほおづえ</sup>頬杖を突いた

顔を此方へねじ向けました。

「何んでもありませんよ。ほんのちよいとしたことだ」

「そうじゃあるまい、何んかお前思い込んでいるだろう。借金取に追っ駈けられるとか、義理が悪い昔馴染むかしなじみに取っちめられたとか」

「そんな事じゃありません」

「だって、急に起居振舞たちいが小笠原流になったり、膝っ小僧がハミ出して居る癖くせに、日本一の鹿爪しかつめらしい顔をしたり、お前よほどあわてて居るんだろう」

「なアに、ほんのちよいとされた事があっただけですよ」

「何んだそのちよいとされた事は？ 気になるぜ、八」

「実はね、親分」

「恐しく突き詰めた顔をするじゃないか。何んだい」

「笹屋ささやのお松が三輪の親分に縛られたんですよ」

それは当時、両国の水茶屋ちやくみおんなの茶汲女の中でも、番附に載る人気者で、ガラツ八の八五郎も、一時は夢中になって、毎日通った相手だったのです。

「何んか悪い客の巻添まきぞえにでもなったのか」

「そんな事なら心配しませんかね、人殺しの疑いが掛ったんだ相そうで」

「人殺し？」

「親分はまだ聞きませんか、ゆうべ平右衛門町の河岸っ端で、浪人者の殺された話を」

「聴いたよ、福井町の城弾じょうだん三郎ろろうという評判のよくない浪人者が、脇差で胸を突かれて死んでいたんだってね。——恐しく腕の出来る浪人者だというじゃないか、茶汲女や守りっ娘こには殺せねえよ」

「ところが、三輪の万七親分は、お松を縛ったんで、——尤もつともお松は悪い物を持っていました」

「何を持って居たんだ」

「ギヤマンの懐鏡、——こいつは男の癖にお洒落しやれだった城弾三郎の自慢の品だったんで」

「フーム」

「けさ友達に見せているところを、運わるく城弾三郎殺しの下手人捜しに来て  
いる、お神楽かぐらの清吉に見られてしまったんです」

「怪あやしい品なら、岡っ引の見る前で出す筈はないじゃないか」

平次はさすがに気が付きます。

「だからお神楽の清吉が、そのギヤマンの懐鏡をどこから出した。貰ったら貰ったで宜いが相手を言えと責めたが、お松はどうしても言わねエ」

「その懐鏡をくれた相手に心中立をしているんだろう。お松を張るのは無駄だよ、八。宜い加減にして止すが宜い」

「そんなつもりじゃありませんよ。——あつしは、お松を助けようとも何んとも思っっちゃおりません。ただ、親分が訊きくから、ちよいと話したただけで」

ガラツ八は急に堅くなりました。

「そうか。そんな遠慮があるから、小笠原流で番茶ばんちゃなんか飲んで、恐しく突き詰めた顔をしているんだな。いつもの八五郎なら、大変だいへんッ大変だいへんッと大變だいへんのつき物がしたように飛込むところだ」

「親分」

「宜よろいよ、行って見るよ。今日俺の方から出かけて行って、お松の繩を解いてやろう。尤もっとも、繩を解いても、お松はお前のところへは転げ込まないよ」

「親分——あつしはお松のことなんか何んとも思っっちゃいけませんよ。唯ただこの一年ばかり、毎日のように顔を見て、お茶をくんでくれた相手だから——」

「毎日行ったのかえ、本当に」

「へエ、めんぼく面目次第ありません」

「馬鹿だなア」

平次はそう言いながらも、立ち上がって仕度しました。

## 二

平右衛門町の現場へ行つたのは、もう陽が傾かたむきかけてから。——死骸も取片付け、現場も掃はき清めて、そこにはもう何んの手掛りも残ってはいません。

本来ならもう少し早く覗のぞいておくべきですが、三輪の万七が乗出したと聴いて、引込思案の平次が顔を出さずにいるうちに、事件は急進展して、八五郎の歎きを見ることになったのです。

近所の噂うわさや、八五郎の見聞みきこしたことを綜合そうごうすると、ゆうべ亥刻半よつはん（十一時）

過ぎ、町内の夜講帰りが二三人、無駄話をしながら通ると、平右衛門町の路地の奥、町の者が船着き場に行っている形ばかりの棧橋さんぼしの手前に、何やら倒れている者があつたのです。

少し遅い月がようやく河心かしんを照らし初めた頃で、うっかり知らずに通るところでしたが、そのうちの一人がつかまずきそうになつて悲鳴をあげ、それから大騒ぎが始まりました。

灯あかりで見ると、倒れているのは三五六の浪人者で（後でそれは福井町に住んでいる城弾三郎と知れましたが）脇差で左の胸を深々と刺され、切尖きつさきが白々と背に突き抜けたまま、横っ倒しになつてこと切れておりました。

脇差を抜かずにあるので、大した血は流れませんが、鞘さやはその辺に見当りません。変っているのは、死骸の下半身がぐっしより濡ぬれていたことで、川から這い上つたところをやられたとしか思えません、身みなり扮の立派な浪人者が、夜

の大川へ何んな目的で入ったかは見当もつかなかったのです。

「履物はきものは？」

平次は近所の人に訊きました。

「足袋たびはだしでしたよ」

「刀の鞘と一緒に流れたのかな。——八、人足を頼んで川をあさってくれ。武家の履物の揃ったのと、脇差の鞘があるだろう」

「へエー」

八五郎は心得て飛んで行きます。

その間に平次は、小舟を出させて、石垣の工合から、棧橋の様子を眺めました。石垣には何んの異状もなく、ただ、一箇所棧橋の板を縛った縄が解けたのを、素人細工しろうとぎいで結び直したところが眼にいただけです。

「石垣の間に、何んか隠してあったんですか、親分」



八五郎はもう帰って来ました。

「いや、そんなものは無いよ。石垣が一つでもゆるんでいて、中に千両箱でも隠してあると面白いんだが——近ごろ修覆したばかりで、何んの細工も無いところを見ると、城弾三郎はわざと川へ入ったのではないかも知れない」

「すると？」

「解らないなア。とにかく、もう少し陸をあさって見よう」

そこから平次と八五郎は、福井町の城弾三郎の浪宅へ行ってみました。

浪宅と言っても、中々の構えで、留守は若い綺麗な下女と婆やの二人、おさのにお倉と言って、伯母姪同士が奉公していると言いますが、おさの方は、弾三郎の妾だったという近所の噂が本当でしょう。

疑えば疑える二人でしたが、折よく宵から近所の話好きの老婆が来て、二人とも一寸も家を開けず、これは完全に疑いの外に立ちました。

ほかに、死んだ城弾三郎と無二の仲だったという戸倉十兵衛と名乗る、中年者の浪人が来て、何彼と世話を焼いて居りますが、江戸には知合がなかったのか、あとは近所の衆ばかり、何を聴いても要領を得ません。

「戸倉さん、ちよいと伺いますが」

「何んだえ」

忙しそうにする戸倉十兵衛を、平次はようやく物蔭に引入れました。

「亡くなったこの家の御主人は、どこの御藩中でした」

「九州のさる大藩ということだが、確かなことは私も知らないよ」

「旦那とはいつ頃からのお附合いで？」

「三年にもなるかな。——近所に住んでいて、何方も九州生れで、似たような下手碁だから、ツイ銭湯で懇意になったのさ。——碁敵がポツクリ死ぬと、おそろしく張合が無くなるということを今日初めて知ったよ」

戸倉十兵衛はこう言った調子の滑らかな浪人者でした。

「旦那はゆうべ何処にお出ででした」

「俺は下手人げしゅにんじゃないぜ、ハッハッハッ」

「そんなつもりじゃ御座いません」

「まア宜い、言訳には及ばない。城弾三郎氏のたった一人の知合というのはこの戸倉十兵衛だから、疑われても文句はない。が、有難いことに、ゆうべは川崎の鶴屋に泊っている。小田原に所用があつて出かけ、七日目で今日帰るとこの騒ぎだ。驚いて飛んで来たのはツイ一刻ときほど前さ」

戸倉十兵衛の言うのは満更こしらえ事らしくもありません。川崎の旅籠屋から抜け出して来て、また川崎へ帰って、けさ改めて川崎を発つて来るという芸当が出来ないことは、平次の智恵をまつまでもなくわかり切ったことです。

「城じょうさんに敵はあつたでしようか」

「無いな」

「ひどく怨うらんでる者とか、何んとか」

「あるわけは無い。尤もっとも、城弾三郎氏の方で怨うらんでいる者はあった」

「誰です、それは？」

「阿倍川町に住んでいる、これも浪人者で高木勇名というのだ」

「へエ？」

「何んでも、三年前までは九州のさる大藩で、同役であったということだ。

城弾三郎氏は何んかの事で高木勇名というのと怨うらを構かまえ、高木の讒言ざんげんで浪人したが、まもなく高木の方も禄を捨てて、江戸へ来たということだ」

「――」

「不思議な廻り合せで、お互に遠くないところに住んでいることがわかったが、城弾三郎氏はひどく高木勇名を怨うらんで、出逢はたいしだい討ち果すと云いっていたよ。

尤も高木勇名という男は、一年ほど前から大病で、身動きも出来ないということだ」

「すると？」

「高木勇名の方で、機先を制して城弾三郎を討ったという疑いは充分じゅうぶんにあるわけだが、大病人が平右衛門町まで行くのはおかしい」

戸倉十兵衛はそう言って人の悪そうな冷たい笑を片頬わらひに漂ただよわせるのでした。念のため死骸を見せて貰いましたが、胸の傷は背中まで抜けて、恐しい剛力で脇差を突立てたと分りますが、それにしても心得のある筈の城弾三郎が、刀の柄に手も掛けていかなかったのが不思議です。

「城さんはやっとうの方はどうでした」

「立ち会ったわけではないが、話の工合や眼の配り、身体のこなしなどから見て、よほど出来る様子であったよ」

「それをたつた一と太刀でやったのは、よつほどの腕でしようね」

「大変な力だな。——それにしても、脇差を抜かずに、そのまま置いて行ったのはおかしい。武士の作法にはないことだ」

「脇差はどこへやりました」

「役人が持つて行つたよ。大した銘刀ではないが、決してなまくらではなかつた」

「城さんの昵懇じっこんな方は、他にありませんか」

「一向気が付かないが、まずあるまいな。世間付きあいを好きな方ではなかつた」

話は大方そんな事で尽きました。

「八、気が付いたか」

「何んです、親分」

平次は往来へ出ると斯んなことを言うのでした。

「あの家の中は、禁制きんせいの品だらけじゃないか」

「？」

「城という浪人者は、長崎あたりにいたんじやあるまいか。羅紗らしややギヤマンや更紗さらさや唐木細工からきざいくが一パイイツだ。抜荷ぬけにでも扱わなきやあんな品がふんだんに手に入るわけはないよ」

「それがどんな事になるでしょう、親分」

「俺にも判らないが、城弾三郎が怨んでいたという、高木勇名という人に逢つて見よう」

そこから阿倍川町へ伸のして、高木勇名と訊くとすぐわかりました。路地を入つて奥の奥に置忘れたようなひどい家で、城弾三郎の豪勢な暮しと、あまりにひどい違いようで、銭形平次も眼を見張つたほどです。案内を乞こうまでもなく、破れた障子から中は見透みとおし、大病人らしい父親を看護していた若い娘が、客の姿を見ると、いそいそと起つて格子を開けてくれました。

「町方の御用を勤める平次と申すものですが、福井町の城弾三郎さんのことに就ついて、ちよいとお話うけたまを承うけたいことがございますが——」

平次の態度は慇懃いんぎんでした。

「あの、父は永いあいだ患わづらつておりますが——」

娘は途方に暮れた様子です。

身装みなりは気の毒なほど粗末ですが、十七八の美しい娘で、あどけなく可愛らしいうちにも、武家の出らしい、品のよさが、好感を持たせます。



「これ、——茂野しげの、——お上の御用を承わる方なら、お通し申すがよい。むさ苦しいところだが——」

破れた唐紙からかみ一重を隔へだてて、主人の勇名は声を掛けました。ひどい咳せきに悩まされて、そう言う声も途切れ勝ちです。

「では、——あの、父はお話なんかしますと、すぐ疲つかれますが——」

娘——茂野は、眼を挙げて、救いを求むるように平次を見上げながら、道を開きました。

「御免下さい。御病気のところを飛んだ御邪魔をしますが、実は福井町の城弾三郎様がゆうべ平右衛門町で殺されましたので」

「えッ」

主人——高木勇名の驚きはおおげさ大袈裟でした。見る蔭もなくやつれ果てて、明日も知れぬ命と見えた大病人が、半身を起き直るように枕の上に乗りに出したので

す。

「旦那は御存じでしょうな、城じょうという人を」

「よく知っている。——天罰てんぼつだな」

高木勇名は疲れ果てた様子で、ガクリと枕の上に頬を落しました。熱っぽい匂いが室中に籠って、ムツと鼻を打ちます。

「その城弾三郎という人が生きているころ、旦那様をひどく怨うらんで、出逢いしだい討ち果すと言っていた相ですが、御存じでしょうな」

「よく知っている。——が、私がこの大患で寝て居るのに、幾度もやって来て無礼な事をした奴だ。何んの丈夫でさえあれば、城弾三郎如きに後ろを見せる拙者ではないが——」

高木勇名はそう言いかけて笑うのです。ポーツと頬のあたりに熱が上がって、半分咳せき込みながらの話は聴いている方が痛々しくなります。

「差支えがなかったら、その仔細しさいを明かしちや下さいませんか」

「厭だと言つても聴かずには歸るまい。——お上の御用とあらば、何事も打明けけるのが道だが」

「——」

「故主のお名前だけは勘弁して貰いたい。——実は拙者と城弾三郎は、九州のさる大藩に仕えて、外国船の出入りを取締とりしまつていたことがある——」

高木勇名は苦しい息を継つぎながら、この長物語をつづけました。それによれば、城弾三郎と高木勇名の二人、藩主の命令で、港の役所に出張り外国人や外国船の取締りをしているうち、城弾三郎は悪い商人と結託けつたくし、手広く拔ぬけ荷に（密貿易）の取引を始め、暴利を貪むさつていたことが判りました。

抜け荷は嚴重な国禁で、万一幕府に、藩の役人がそんな事に関係していると知れたら、どんな咎とがめを受けるも知れず、高木勇名は独り心を痛めて、いろいろ

同僚の城弾三郎に忠告し、その反省を促うながしましたが、何んとしても聴き容れず、そのうちに、いつの間にやら藩重役の耳に入つて、城弾三郎は永の暇いとまになつてしまいました。それは今から三年前のことです。禄に離れた城弾三郎は、自分の悪事を棚にあげ、国を逐おわれたのを、事情を知つて居る高木勇名の讒言ざんげんに相違ないと信じ込み、八方手をつくして陥おとしれ、その結果、つづいて、高木勇名も永の暇になり、流れ流れて二人は、同じ江戸の、しかも隣町に住んでいることを発見したのでした。

「かような始末ではござる。死屍ししを鞭打むちうちつようで心苦しいが、申さなければ却かえつて疑惑を増すであらう」

高木勇名はようやくやくこれだけのことを話しおわつて、疲れ果てた顔を枕に埋めました。

「もう一つ、——城弾三郎様は、今までの間に、何か仕掛けるとか、附け狙う

とか、変な素振りは無かったでしようか」

平次は静かに訊き返します。

「あつた。度々この浪宅を襲つたが、病中でもあり、私の方で避けて相手にしなかつた」

高木勇名は淋しく笑います。やつれ果ててはおりますが、分別者らしい品の良い顔で、熱を持った眼も聰明そうに輝きます。

「お子様は、お嬢様お一人で」

平次は最後の問いを投げて、ジツと高木勇名の病気にやつれた顔を見詰めました。

「いや、伴が一人あるが」

「何方にお出ででしょう」

「気に染まぬことがあつて、親類に預けてある」

「御親類と仰しやると？」

「牛込御納戸町の河西源太殿」

高木勇名はこれだけ言うのが精いっぱいです。何んか容易よういならぬ心の苦悩がありそうです。

宜い加減に切り上げて路地の外まで出ると、後ろからバタバタと追って来たのは、娘の茂野でした。

「あの、もし」

「お嬢さん、何んか御用で」

平次は蟠わたかまりのない調子で迎えます。

「父はあの通りの容体で、寝返りも自由にはなりません」

「よく解りましたよ、お嬢さん。あの容体じゃ、どう間違っても外へ出られる筈はありません。御安心なさいまし」

「有難うございます」

茂野は慎つつましく黙礼して、自宅の方へ引返しました。

「良い娘ですね、親分」

ガラツ八はしばらくその後姿を見送ってから、思い出したようにこう言うのでした。

「お松とどうだ」

「お月様とすっぽんで、——育ちが違いますよ」

「すっぽんは喰かみいつくと雷鳴かみなりがなるでま離れないというぜ。気をつけるが宜い」

「喰かみいついちゃくれませんよ」

「なさけない事を言うな」

「そう言えばお松はどうなったでしょう。すっぽんでも亀かめの子でも縛られちゃ

可哀想じゃありませんか」

「そうそうお松の縄を解いてやるのが目あてだったね。だが、あいつは心配しなくても宜いよ。今頃はたぶん許されているだろう。今日の間<sup>け</sup>に合わなくても明日はきつと許される。この八卦<sup>け</sup>は間違<sup>け</sup>いもなく当るよ。——お松と仲の良い男はいつたい誰なんだ。お松が命にかけてもかばってやろうと言うのは——八五郎を除<sup>のそ</sup>いてだよ」

「へッ、あつしをのぞいてと来ましたね。——親分の前だが、あつしを除けばまず門前町の時次でしょうな」

「そうか、時次か。なるほどあれなら小意気で慾が深そうで、ピタリと柄<sup>がら</sup>にはまるよ。なア八、お松はそのギヤマンの懐鏡<sup>ふところかがみ</sup>を時次に貫ったのさ。——時次はたぶん平右衛門町の路地で拾ったんだろう。でなきや、死骸の懐から抜いたのかな。——下手人じゃないとも。自分で殺した死骸から抜いたのなら、その晩のうちにお松にやる筈もないし、第一、時次風情<sup>ふぜい</sup>に城弾三郎は殺せないよ。あ



れは容易ならぬ使い手だ」

「それじゃ、下手人はやはり高木勇名という浪人でしょうか。随分いろいろのけびよう仮病つかいも見たが、あいつは念入りですね」

ガラツ八は後ろの浪宅を指します。

「いや、あれは仮病や偽患にせわずらいではない。どんな辛抱の良い人間でも、一年も仮病をつづけられるものじゃない。それに、あれは労咳ろうがいもよつほど重い方らしいじゃないか」

「すると、高木勇名は何んにも知らないわけですね」

「いや、知っている。たしかに下手人を知っているに違いない。城弾三郎が殺されたと聴いた時の驚きようは大変だった」

「その下手人は誰でしょう」

「それはわからないが、——俺は明日の朝、御納戸町おなんどの河西源太という人の家

へ行つて見ようと思う、お前は時次に逢つて見てくれないか。お松は一と晩く  
らい番所で窮命きゆうめいさせるもよかろう、浮氣の虫封じむしふうになるぜ」

「へエ」

「それから念のためにこの近所の衆に、ゆうべ高木勇名の家に入りました者はないか訊いて見よう」

平次のこの注意は尤も至極もつとでした。が、予想の通り、高木勇名はこの一年越し外へ出たこともなく倅の敬太郎の姿も半年余り見えず、たまたま外へ出るのは娘茂野の小買物やら、薬取りやら、質屋通いやらの姿だけと言うことでした。

茂野の評判は大変なもので、阿倍川町の孝行娘で通ります。昨夜も父親の容体が悪かったらしく、二度までもあたふたと平右衛門町の医者いしやに薬取りに行つたのを見たと言う者があります。

御納戸町の河西源太というのは、町道場の主で、すぐわかりました。

高木敬太郎と名指して訪ねると、道場の入口に現れたのは、二十歳前後の寛達な青年武士で、これは妹の茂野によく似た見るから氣持の良い爽やかな若者です。

平次が城弾三郎の殺された事を言うと、

「それは惜しい事をした。もう少し生きていたら、この俺がやつつけるのだったが。——尤も今までも二三度出つくわし、一度などは抜き合せるところまで行ったが、人に止められて物別れになったこともあるよ。それが知れて、父上からうんと叱られ、勘当同様にこの道場に預けられているんだ」

何んのわだかまりもなくこんな事を言う敬太郎だったので。

「昨夜はどこにお出ででした」

平次は気を引いて見ました。

「口惜くやしいが平右衛門町へは行かない。兵書の輪講で亥刻よつ（十時）までは起たつことも出来なかった」

「ではもう一つ伺いますが、高木様のお仕えしたのは、どこの御藩で」

「それは言わないことになって居るんだ」

「大村藩でございましたよ。——それとも平戸？ 鍋島」

「——」

「いや、飛んだお邪魔いたしました。阿倍川町の父上様は重態ですよ。城弾三郎が横死おうれした上は、御遠慮には及びません。御見舞にいらっしやい」

「そうか、それは有難う」

平次はそこから直つすぐに久保町の大村丹後守屋敷に飛んで行ったことは言

うまでもありません。敬太郎の明けっ放しな顔にはそう書いてあったのです。用人に逢つてきくと、何んの隠すところもなく言つてくれました。

「城弾三郎というのは如何にも三年前不都合のことがあつて追放したに相違ない。高木勇名は自分で身を退いたと言う方がよかろう、惜しい武士であつたが。

——それから念のために申しておくが、城弾三郎は犬畜生いぬちくしょうにも劣つた奴で、いまだに何彼と主家に迷惑を相かけ、ときどき強請ゆすりがましい事を申して来るため、家中の若侍は、こんど参つたら一刀両断にしてやると意気込んでいる有様じゃ。人手に掛つて相果てたのも、天罰てんばつというものであろう」

こう聞くと、城弾三郎の下手人を捜すさがのがいやになります。

神田の家へ帰つて来ると、ガラッ八の八五郎は、欠伸あくびをしたり、鼻歌を歌つたり、粉煙草をせせつたり、退屈のつき物がしたような顔で待つておりました。

「親分、お察しの通り、天眼通だ」

路地に平次の姿を見るともうこれです。

「何んだ騒々しい、近所の衆がびつくりするじゃないか」

「でもね、こいつは全く兜かぶとを脱ぎましたよ。親分の言ったことが一分一厘違わず当たったんだ。——お松はあのギヤマンの鏡を、時次の野郎に貰ったに相違なく、時次はあれを平右衛門町の路地で、拾ひろったと言っていたが、二三十引つ叩かれると、苦もなく恐れ入ってしまったよ」

「死骸の懐から抜いたんだろう」

「その通り。——それも念入りに、引き汐の川へ落ちていた死骸を引揚げて、その懐から抜いたというじゃありませんか。呆れ返ってお松も愛想あいそを尽かしていましたぜ」

「よく死骸が見付かったね」

「夜釣よづりに行こうかしら——と、棧橋の上に立って潮の工合を見ると、ちよ

うど月が上つて来たんですって。見るともなく見ると、足元の石垣の下に、半分水につかつて人間が落っこっている。怪我で落ちたものと思ひ込んで引揚げを見ると、胸に脇差が突っ立って息が絶えていたんだ相で、胆きんむをつぶして逃げかけたが、あの野郎慾張っているから、恐る恐る引返して懐へ手を入れて見た

——

「何があつたんだ」

「懐鏡が一つと、香木と、蜻蛉玉とんぼだまと、何んとか言う茶入が一つ。それに金が小

判で三百五十両」

「恐しく持っていたんだな」

「時次の野郎猫ばばをきめて、懐鏡一つでお松の気を引こう等は太てえ量見じゃありませんか」

「まア、怒るな、八。それより、脇差の鞘さやと弾三郎の履物はきものは見付かったのか」

「鞆は両国で、履物はあの棧橋の下の泥の中で見付かりましたよ」

「よしよしそれで大方見当は付いた。これからお船番所へ行くが、お前も一緒に行つてくれるか」

「何処までも行きますよ」

平次はそこからすぐ豊海橋とよみばしの船番所に飛び、舟手役人の助力で大川筋一パイに調べました。

## 五

大川筋の船、大きいのは五百石、千石積づみから、小さいのは釣舟、猪牙船ちよきぶねにいたるまで、虱潰しらみつぶしに調べあげられた結果、抜荷ぬけにを積んだ船が一艘発見されまし  
た。船頭は海賊銀太という顔の通つた男、取引した南蛮物なんばんものを持って、大阪、名



古屋、江戸と、諸国の港を渡り、それを金に代えて、おびただ夥しい金銀を、もうけて居たのです。

平次の注意で、一方町方の手は、福井町の城弾三郎の家を捜し、そこに夥しい禁制品を隠してあるのを発見した上、さらに戸倉十兵衛を捕えて調べると、これも城弾三郎や海賊銀太の仲間で、国禁を犯しておか夥しい抜荷をさばいて居ることがわかりました。

「親分、抜け荷の調べは宜いかげんにして、城弾三郎殺しを挙げちゃどうです」  
ガラツ八がそんな事を言い出したのは、抜け荷検挙騒ぎから五六日経ってからでした。

「宜いよ、今に判るよ」

「何が判るんです、親分」

「弾三郎殺しの下手人がわかる時節があるのだよ」

「へエ——。そのうちに暮になりますよ」

「借金じゃあるまいし、こんな事に盆ぼんも暮も関係があるものか」

そんな事をいって居るところへ、阿倍川町の高木勇名の娘茂野が、眼を泣き  
脹はらしたまま訪ねて来ました。

「お、どうしました、お嬢さん」

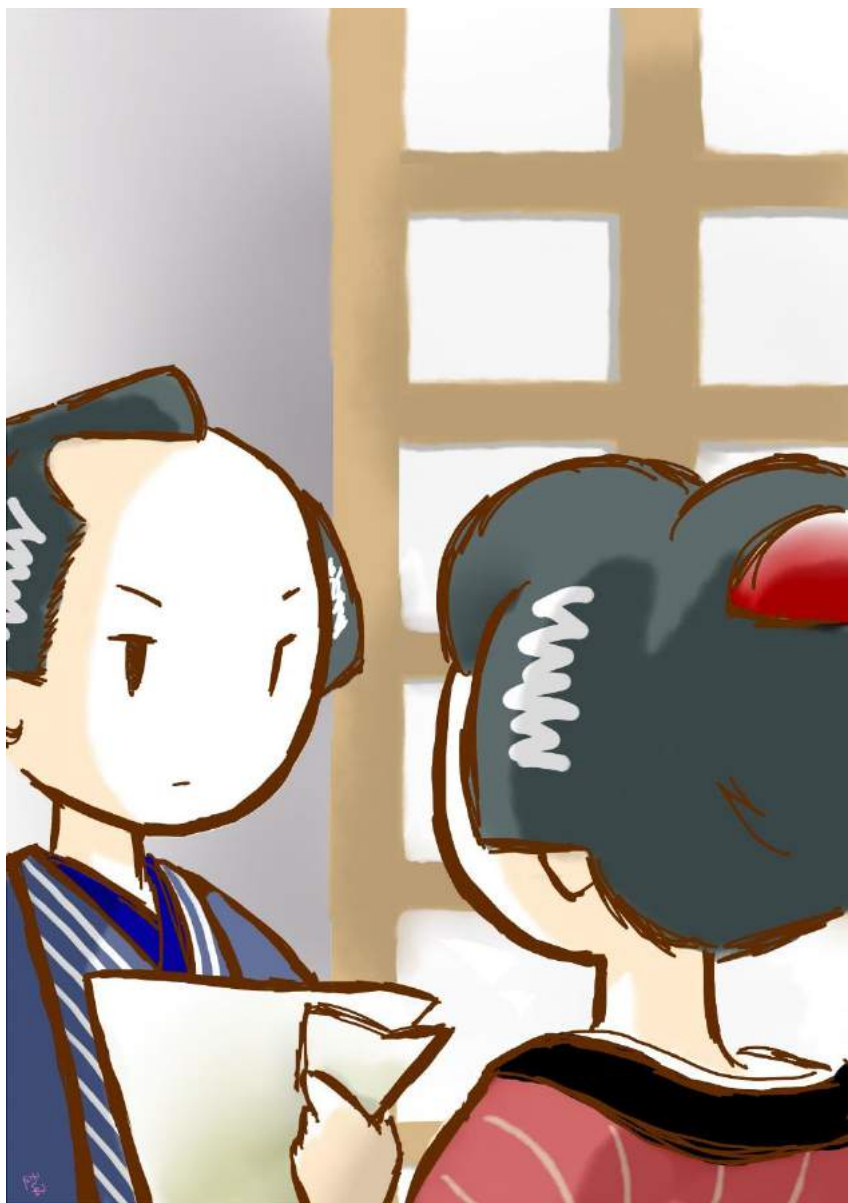
「父が亡なくなりました」

「それはそれはお気の毒な、いつ亡くなつたんで」

「三日前でございます。きのう葬とむらいを済ませてさっそく参りました。父が死ぬ  
時、これを一日も早く親分に渡すようにと申しましたので」

茂野はそういって、小風呂敷の中からいねいに包んだ一封の手紙を取出し、  
平次の膝の前に押しやるのでした。

「それはわざわざ恐れ入りました。さっそく拝見します」



押し頂いて平次は、静かに封を切って読み下しました。ほんの二三行の病人らしい苦惱にゆがんだ文字に、何んな意味があつたか、平次は静かに畳み直して、

「ありがとうございます、お嬢さん。これでよく解りました」

眉も動かさずにいうのです。

娘——茂野が淋しく帰つた後で、ガラツ八は飛びつくように訊きました。

「何が解つたんです、親分。その手紙に何が書いてあつたんです」

「見るが宜い、この通りだ」

平次の出した手紙というのは、半紙に書いた字がたった三行。

城弾三郎を討つたるは宿怨しゆくえんを果すためこの高木勇名の仕業

に相違無之誓言仕候

とだけ、それも乱れた筆跡で、平次の助けがなくては、ガラツ八にはとても

読めません。

「やはりあの病人ですかね、へエー」

ガラッ八はすっかり感服しております。

「嘘だよ、八」

「へエ——」

「この遺書いしよは嘘だよ。あの病人が死ぬ二三日前に這い出して、平右衛門町まで行って人を殺せるわけではない。高木勇名という人は、死ぬまで本当の下手人を庇かばっているのだ」

「すると下手人は、その倅の敬太郎とかいう若侍ですか」

「いや、敬太郎はあの晩兵書の輪講の幹事をやっている。一步も出なかつた」

「すると？」

「解らないか、八」

「へエ——」

「あの娘だよ。茂野という、今ここへ来た娘だよ」

平次の言葉はあまりにも予想外です。

「そんな馬鹿なことがあるものですか、私をかつぐつもりでしょう」

「お前をかついでも仕様があるまい」

「でもあんな可愛らしい娘が」

「可愛らしくたって、重病の父親を幾度も幾度も襲おそいかけた悪者——兄がそのために命を賭かけて争おうとした怨敵——主家大村丹後守様まで強請ゆするふとい悪党——それを討ち取るために、精いっぱいおその智慧を絞ったところで不思議はあ  
るまい」

「へエ——」

父の遺書

「高木勇名という人が、倅を勘当したのも、禍わざわいの我が子に及ぶのを恐れたため

だろう。万一城弾三郎と生命のやり取りをして、勝てばいいが、負けては取返しがつかない。それに敬太郎は恐しく一本調子な若者だし、相手の城弾三郎は凄腕前だ。——倅を遠ざけるに越したことはないと思つて牛込の親類へ預けた」

「その凄腕前の敵を、小娘の茂野がどうして殺したでしょう」

「何んでもない事さ。——城弾三郎が抜け荷を扱あつかっていることを、茂野が知つていたのかも知れない。それに平右衛門町の路地の入口には、父親を診みてもらつている医者かんさいの寛齋がいる。近所の衆はあの晩茂野は二度も薬取りに出たといつたじゃないか」

「——」

「あの晩茂野が薬取に行った序ついでに覗いて見ると、城弾三郎が棧橋を渡つて海賊銀太の舢舨はしけに乗つた。話声ですぐ帰ると解つたとしたら、茂野はどうするだろう

う

「――」

「家へ帰って脇差を持ってまた飛出したんだろう。平右衛門町へ行つて見ると、まだ時刻があつたから、棧橋の板を一枚外はずして待った。――板を結えた縄を解いて、踏ふめばすぐ外れるようにして置いたんだろう。――抜け荷の取引を済ませて帰つてきた弾三郎は、一杯機嫌で棧橋へかかると、首尾しゅびよく茂野の仕掛けた罠わなに陥おちて、板を踏み外した。物蔭に隠れていた――茂野の脇差が、そこを突いて出たとしたら、娘の細腕でも、背後へ突き抜けるわけではないか」

「フーム」

ガラツ八は唸うなりました。あまりにも明かな推理です。

「城弾三郎は心の臓を刺さされて、声も立てずに川へ落ちると、茂野は一度外した仕掛けの板を、元通り結んでおいた――恐しく落着いた娘だが、悲しいこと



に素人しろうとの、それも小娘の手では本当の縄の結びようが出来ない。板を縛った縄の結び目と、背後はいごへ突き抜けた脇差を捨てて逃げたのと、泥の中に深く入った履物と——そんなものが揃うと、あの晩二度まで薬取りに出た茂野が怪しくなるではないか」

「解りました。それで、此先どうするんです、親分。あの娘を縛るんですか。」

——「可哀想に」

「どうもしないよ」

「？」

「こんな証拠じゃ人は縛れない、皆んな俺の夢物語だよ。——城弾三郎を殺した下手人はやはり高木勇名さ、それで宜いじゃないか。親心を無にしちやいない。俺は此手紙を八丁堀の笹野の旦那にお目にかけるよ。——お松と時次のこと気がなるというのか、あきらめるがいい。お松はあんなにまでして、時

次をかばって居るじゃないか。時次は死骸の懐を探るようなケチな野郎さ。八五郎さんの鞆当さやあての相手になるものか。お前にはもつと結構な娘を見付けてやるよ。——あの茂野さんのような。なア、八」

平次はそう言つてゴロリと横になりました。

相変らず日向ひなたで煙草の煙を輪に吹いて、暮の近づくのも知らぬ呑気な顔です。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵—萩 柚月

初出—「オール讀物」昭和十七年十二月号 文藝春秋社

底本—「錢形平次捕物全集」第七卷 河出書房 昭和三十一年八月五日初版

編集・発行 銭形倶楽部

父の遺書



# 錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>